

環境  
保全型  
農業

新たな食文化の  
創造への貢献

滋賀県草津市

株式会社アグリケーション



取組内容

- 約48人を雇用し、露地14haとハウス4ha(140棟)で青ねぎを生産。出荷施設や加工施設などを順次整備し、青ねぎやきざみねぎの出荷を拡大。きざみねぎは全国の小売店など200店舗以上で販売。
- 土作りにこだわる微生物農法を実践。(株)アヤシロと協力し、道路や河川維持管理の剪定枝や雑草を独自の技術で堆肥化して圃場に散布し、「養土育ねぎ」として生産・出荷。
- きざみねぎの容器をプラスチックを75%削減した包材に変更。また、衛生管理技術の向上による消費期限の延長や開封や保存などで扱いやすく包材を工夫するなど、フードロス削減に貢献した取組を実施。
- 安定した労働力の確保のため、フレックスタイム制や時短勤務、育児休業制度を導入し、毎年の賃金アップにも取り組んでいる。また、リクルート活動の一環として、業務用の計量・包装機の製造販売を行う株式会社インダとコラボし、立命館大学食マネジメント学部生向けに食や農業の重要性と就職を考えるセミナーを開催。

取組に至った経緯

- 青ねぎの生産、販売及びカット加工に取り組んでいる野菜団地である草津市北山田地区において、平成9(1997)年6月に設立。  
働きやすい労働環境を整備し、高齢化に伴う遊休農地の受け皿として地域と連携した取組を実施。
- SDGsや滋賀県が取り組むMLGs(マザーレイクゴールズ)など、環境保全に資する取組を積極的に実施。

取組の成果(受賞等)

- 平成28年度農林水産祭(第65回全国農業コンクール) 農林水産大臣賞
- 平成30年度近畿地域未来につながる持続可能な農業推進コンクール(有機農業・環境保全型農業部門) 近畿農政局長賞



容器を袋タイプの包装にし、「養土育ねぎ」としてプラスチックを75%削減 生産・出荷

今後の展望

- 引き続き安全・安心でおいしいねぎを出荷できるよう、栽培面積の拡大と循環型農業の実現を両立しながら、地域における雇用や食育を大切に、新たな食文化の創造への貢献を目指す。
- より一層環境問題に取り組み、未来につながる持続可能な農業をめざす。
- 海外を視察することで、新たな気づきが生まれ、視野を広げられていると考えており、今後は従業員も派遣し、人材育成に繋げたい。

## 滋賀県草津市

### 有限会社クサツパイオニアファーム

環境  
保全型  
農業

食べられる村をつくる



### 取組内容

- 生産面積約55haの内訳は、有機栽培が45ha、有機への転換期間中が4ha、農薬使用削減等で6haである。滋賀県最大規模の有機農業法人であり、農業生産の経営軸は有機栽培。作物は水稻31ha、大麦23ha、大豆9ha、野菜1.3ha(露地1ha: 赤しそ、菜花、ハウス0.3ha: ほうれん草)ほか、地域の水稲作業受託も約50ha取り組む。
- 今後、更なる有機栽培の生産面積拡大を計画しており、有機農産物の販路開拓を行う。
- 農業生産は、同時に田畑の景観も美しくすることができる仕事。集落全体が見栄えのする「食べられる村」になるように豊かな地域づくりを進める。

### 取組に至った経緯

- 直接消費者に安心なお米を届け、消費者の声を聞くことで米の味を追求。
- 平成9年から無農薬の水田雑草対策として合鴨栽培を開始。農薬を使用しなくても水稻生産ができることを確信し有機栽培に取り組む。

### 取り組む際に生じた課題と対応

- 合鴨農法が平成24年に鳥インフルエンザ拡大の影響を受け取組終了。
- 水田雑草対策として、2回代掻きと田植え後に米ぬかペレットを散布。
- 面積の拡大と共に歩行型除草機に加え乗用除草機を導入。

### 取組の成果(受賞等)

- 平成12年 水稻で有機JASの認証を取得。
- 平成19年 野菜で有機JASの認証を取得。
- 令和4年 「みどりの食料システム法」に基づく、全国初の「グリーンファーマー」に認定。

### 今後の展望

- 乗用除草機の追加導入などによって、水稻・大麦での有機JAS認証栽培面積の拡大、生産量の拡大を目指す。
- トヨタ式改善計画で組織経営、生産性の向上を図る。



有機栽培米



美しい田園風景

滋賀県野洲市

中道農園株式会社

環境  
保全型  
農業

安全でおいしい  
お米を作ります



## 取組内容

○ 昔から水稻の有機栽培に取り組んでおり、昭和58年には「減農薬栽培」への取組を始め、平成8年からは本格的に無農薬栽培に取り組み、研究や経験を重ねた豊富な知識で、有機栽培技術の向上に貢献している。近年では、ITや微生物を活用するなど更なる取組に挑戦し、低コストで効果的な有機栽培技術の向上を図る。

## 取組に至った経緯

○ 農薬による健康被害を家族や自身で経験し、「このまま農薬に頼った農業を続けていけば、やがて命を落としてしまうのではないか」という危機感から、有機農業を学び推進した。

## 取り組む際に生じた課題と対応

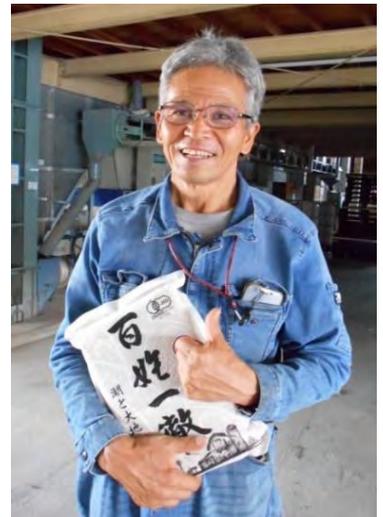
- 雑草対策に多大な労力がかかるため、田植機を自身でカスタマイズした除草機で除草作業を行っていたが、最新式の水田用除草機やアイガモロボを導入することで、除草作業を効率化、省力化。
- 水稻の病害対策として、殺菌剤の代わりに酢(酢酸)を希釈して使用。
- ヤクルトを種菌とした乳酸菌液を自家培養し、低コストで効果的な病気対策を実施。
- 自家製のもみ殻ぼかし堆肥やもみ殻くん炭による地力の改善。

## 取組の成果(受賞等)

- 平成12年有機JASの認証を取得。
- 平成24年度 アグリフードEXPO輝く経営大賞(環境部門)(日本政策金融公庫事業)
- 平成25年 あなたが選ぶ日本一おいしい米コンテスト優良金賞
- 令和4年 「みどりの食料システム法」に基づく、全国初の「グリーンファーマー」に認定。

## 今後の展望

- 有機栽培から更に踏み込み、完全無農薬・無肥料による自然栽培を拡充。
- 子供達が安心して食べることができる、生命力ある美味しい米作りを続ける。
- どんご遊びや田植え体験等のイベントを開催し、子供たちに自然や農業の魅力を体感させる。
- ITと微生物とのコラボで未来のオーガニックに貢献できる取組に挑戦。



有機栽培米を手に持つ中道さん

京都府京都市

株式会社 オーガニックnico

環境保全  
型農業

データ活用型有機農業で  
有機イチゴのトップブランドを目指す



## 取組内容

- (株)オーガニックnicoは、「環境に優しくおいしく健康に良い野菜づくり」をコンセプトに、イチゴを中心に有機野菜を栽培し、農地の「有機JAS認証」取得にも積極的に取り組んでいる。
- 会社設立時から、持続可能なデータ活用型農業の技術開発・普及を担う「アグリサイエンス事業」と、その技術を活かした野菜づくりを実践する「有機野菜事業」の二本柱で経営を展開。
- 有機農法で黒字経営ができる体制を構築するため、日々、品質と生産性を高める技術開発と組織運営に取り組んでいる。

## 取組に至った経緯

- 代表は、長年、光エレクトロニクス分野のエンジニアをしていたが、年を重ねるごとに地球環境に直接関わる仕事がしたいとの想いが募り、南丹市で有機農業に参入。就農3年目に法人化、7年目に大原野に拠点を移して、有機栽培の生産技術開発に本格的に着手し、現在に至る。

## 取組の成果(受賞等)

- 有機野菜事業では、約160a(ハウス62a、露地約1ha)で主にイチゴやトマト、ベビーリーフ、九条ネギなどを栽培。
- アグリサイエンス事業では、有機野菜栽培や環境制御に関するコンサルティングなどを手掛けている。
- 令和7年2月8日、中村代表が校長を務める亀岡オーガニック農業スクールの第二期講座がスタートした。

## 今後の展望

- 同社では、社名の由来にもなっている「2525(ニコニコ)運動」と呼ぶ活動を展開。有機農産物のシェアを25%まで引き上げて、有機農産物が当たり前になるよう取り組んでいる。



環境制御システムで管理されたハウス



有機栽培で育てたミニトマト

京都府亀岡市

ソルモンド

環境  
保全型  
農業

土づくりから始まるおいしい野菜



## 取組内容

- 微生物や酵素の作用を活かした農法を実践。良質な土づくりを行い野菜が本来持つ力を引き出し、化学肥料や農薬にはなるべく頼らない栽培に取り組んでいる。
- 九条ねぎを中心に、白ねぎ、まくわうりなどを栽培。また、研修生が率先しハウスでレタスの安定収穫を目指し奮闘中。

## 取組に至った経緯

- 2012年に富永氏、杉本氏は、有機農法、微生物酵素農法を実践する農場で研修し、2014年新規就農。2015年に二人（富永氏（左）と杉本氏（右））で農業経営を開始。
- ソルモンドとは、フランス語で「土」を意味する「ソル」と、「世界」を意味する「モンド」を組み合わせた造語。

## 取り組む際に生じた課題と対応

- 新規就農当時は、近隣の認知度が低く、土地の確保や販路開拓に苦労した。しかし、自ら作る堆肥でおいしい野菜を作り続け、経営を継続することで周囲から信頼を得ることができ、農地確保や雇用の確保に繋がりがつつある。



ほ場で白ネギを栽培

## 今後の展望

- 微生物酵素農法で、野菜を作り続け亀岡の地で持続可能な農業を目指し、付加価値のある野菜の販売拡大や農業による地域活性化、後継者育成につなげていきたい。
- 研修生を積極的に受け入れを行いながら、農地の斡旋や就農後の販路確保にも協力していきたいと考えている。

京都府京丹後市

株式会社 エチエ農産

環境保全  
型農業

環境にやさしい農業を  
まじめにコツコツと



## 取組内容

- (株)エチエ農産は、自然環境に配慮した「環境保全型農業」に取り組み、エコファーマー認定を受けるとともに、農地の「有機JAS認証」も取得。有機JAS認証農場以外の農場でも化学肥料や化学農薬の使用量を低減した特別栽培米や野菜を栽培してきたことで、今ではコウノトリが頻繁に訪れるようになり、水田で羽を休める姿は、すっかり日常の風景となっている。
- 2025年の年間作付計画では、水稲27haの内、有機栽培は2.5ha。露地野菜7haの内、有機栽培は2.5ha(人参90a、里芋80a、玉ねぎ35a等)に取り組む。

## 取組に至った経緯

- 就農当初は、主に水稲とタバコを栽培していたが、農薬を多用するタバコ栽培に疑問を抱き、本当にやりたい農業は、「未来の子供たちのために安心・安全な農産物をつくること」との想いに至り、これまでコツコツと一から土壌作りに取り組んできた。

## 取組の成果(受賞等)

- 2012年「第17回全国環境保全型農業コンクール」優秀賞  
(主催: 全国環境保全型農業推進会議)
- 「第61回全国農業コンクール」優秀賞 (主催: 毎日新聞社)
- 2015年「若手農業者 京都府知事賞」(主催: 京都府)
- 2019年「農事功労者 緑白綬有功章」(主催: 公益社団法人大日本農会)

## 今後の展望

- 高齢化が進む中、豊かな自然に配慮した農法を実践しながら、地域の農地を守っていくとともに、これからも未来の子供たちのために、まじめに手を抜かず、安心・安全な農作物を作り続けていく。コウノトリが訪れる姿を見るたび、その想いは益々強くなっている。



コウノトリが訪れている様子



独自ブランド「おおきに大地米」  
商標登録もされている

## 京都府京丹後市

### ビオ・ラビッツ株式会社

## 環境保全 型農業



オーガニック野菜を通じて  
幸せと健康をとどけたい

### 取組内容

- 自然豊かな丹後地域で、ニンジン、ダイコン、タマネギ、サツマイモ、京野菜など、1年を通じて100品目以上の有機野菜を栽培。
- 自社生産した有機野菜を使い、加工品（調味料、ポタージュ、ドレッシング、ケーキ・サレなど多数）の製造・販売やカフェ営業を行う。
- 一般消費者向けに、野菜の栽培を体験できる体験畑や畑ツアーも企画。

### 取組に至った経緯

- 同社の代表は、学校給食に輸入野菜が多用されている現実を知り、子どもたちに安心・安全な野菜を食べさせたいとの思いから有機農業に切り替え、平成19年(2007年)に有機JAS認証取得。
- 平成22年(2010年)に京丹後市農業経営者会議の仲間とともに学校給食委員会を立ち上げ、学校給食に地元産食材を使う活動を開始。京丹後市では毎月19日を「まるごと京丹後食育の日」とし、前後1週間は市内産の米と野菜を使った給食を提供しており、同社ではこの活動に積極的に参画。
- 食育や自然と繋がることの大切さを楽しく発信するため、令和2年(2020年)4月に法人化し、ビオ・ラビッツ株式会社を設立。



定植作業の様子

### 取組の成果

- 有機JAS認証を受けている面積は順次拡大しており、現在約7ha。
- 同社では、正社員が10名・臨時雇用7名のほか、繁忙期にはアルバイトなどの地域雇用を行っており、同社で栽培技術や経験を積んだ独立就農者など、地域就農者の確保・育成にも貢献。

### 今後の展望

- 同社の土づくりは、落ち葉や刈草を集めてきて、「自然から生まれる土」を畑で再現している。現在、近隣河川敷の管理で生じる刈草も堆肥化して土づくりに活用しており、本取組は、有機農業を拡大していく上で有機質肥料の供給量不足への備えや経費節減にも効果があることから、有効な資源として今後も活用していきたい。



自社の加工場、直売コーナーを併設するオーガニックカフェ「てんとうむしばたけ」

兵庫県豊岡市、養父市、朝来市、香美町、新温泉町

たじま農業協同組合

環境  
保全型  
農業

コウノトリとの共生を  
目指した農法



取組内容

- コウノトリ野生復帰のため、多様な生き物が暮らせる環境づくりを目指し、環境への負荷軽減と安心・安全な米の生産を実現する環境保全型農業を推進。
- 堆肥は生き物のエサとして散布し、資源循環のために地元産の牛ふんと鶏ふんの活用を推進しているほか、通常の稲作にはない冬みず田んぼや早期湛水等の水管理により、水田に生息する生き物を保全するなど持続的な農業生産を推進。
- 令和6年時点で8か国・地域(アメリカ、シンガポール、香港、UAE、オーストラリア、イギリス、スイス、オランダ)に輸出。

取組に至った経緯

- コウノトリは生育環境の悪化により生息数が急減。最後の生息地であった豊岡市では「コウノトリ野生復帰プロジェクト」の取組を進めてきた。
- 「コウノトリも住める豊かな文化・地域・環境づくりを目指す」という明確な目的のもと、農薬や化学肥料に頼らず、美味しいお米と多様な生き物を同時に育む「コウノトリ育む農法」が誕生。

取組の拡大状況

- 取組面積 平成15年 0.7ha → 令和6年 533ha
- 取組農業者数 平成15年 5名 → 令和6年 250名

取組の成果(受賞等)

- 平成22年度 第12回グリーン購入大賞 環境大臣賞
- 平成24年度 第42回日本農業賞 第9回食の架け橋賞
- 平成27年度 但馬産業大賞 自然と共生する環境創造事業部門
- 平成30年度 COOL JAPAN AWARD 2017
- 令和元年度 近畿地域未来につながる持続可能な農業推進コンクール GAP部門 近畿農政局長賞
- 令和2年度 未来につながる持続可能な農業推進コンクール(有機農業・環境保全型農業部門)農林水産大臣賞



海外展示会に出展

今後の展望

- 様々なステークホルダーとの関係構築や共感でつながるパートナーとの協働を進め、取組の拡大を目指す。
- 有機米産地として、より高い栽培技術の確立、持続可能な産地を目指す。

兵庫県丹波篠山市

株式会社アグリヘルシーファーム

環境  
保全型  
農業



おいしく安全な農産物を食卓に

## 取組内容

- 環境に配慮した水田農業87ha。慣行栽培の基準の農薬・化学肥料の使用を50%以下にした栽培が90%、残り10%は無農薬、無化学肥料での栽培。
- 親族が経営する牧場からの堆肥による土づくり。田植え前には有機肥料の施肥、除草機による除草、令和5年からWCSIにも取り組む。

## 取組に至った経緯

- 自分で育てたものに自分で値段をつけ、お客様に直接食べてもらい、美味しいとの声を聞くことにより農業のイメージがやり方で大きく変わることを実感し、美味しく安全な農産物を食卓に届けられるように取組を開始。



除草機による除草

## 取り組む際に生じた課題と対応

- 米は、収穫量よりも美味しさにこだわり、肥料は控えめに栽培することにより、タンパク質含有量を下げ、7%を切れば美味しいといわれている中で6%~6.5%のものを生産。運送費高騰への対応が課題、自ら配送する方法も検討。

## 取組の成果

- 兵庫県稲作経営者会議、兵庫県農業法人協会、兵庫県青年農業士会、株式会社兵庫大地の会等で要職を経験、ひょうご農業MBA塾卒業。

## 今後の展望

- スポーツ施設でのイベントや高校生の部活動の補食に、おにぎりを作って販売するキッチンカーを導入。

兵庫県市川町

牛尾農場

環境  
保全型  
農業



有機農業を楽しんでチャレンジ  
食の大切さを次世代へ

## 取組内容

- 有機農法で米や60品目以上の野菜を栽培し、収穫翌日に新鮮な状態で届く野菜セットとして個人向けに販売。
- 採卵鶏は、初生雛から育て、平飼い鶏舎において自家配合飼料で飼育。
- ワクチンや薬剤を使用せず、飼料原料も国産にこだわり、国産大豆のおから、地元産の小麦や米、地元商店から仕入れた魚粉・牡蠣殻等を配合させて発酵。

## 取組に至った経緯

- 幼い頃から、父が有機農業に取り組む姿勢を見て育つ。
- 2014年に農場を継承し、次の世代に繋げるために、新しい技術等も取り入れつつ有機農業を維持、発展。

## 取り組む際に生じた課題と対応

- 太陽熱マルチ殺草処理を取り入れることで、有機農業に取り組むうえでの大きな課題である雑草対策を実施。
- 全て露地栽培で、使っている肥料は自家製の鶏糞を使い、土壌の栄養バランスを保つため、稲がクリーニングクロープとして作用する「田畑輪換」農法を導入。



牛尾農場で採れた旬の野菜

## 今後の展望

- 農場で収穫した大豆と米で、麴作りから行った自家製の味噌を一般向けの販売に展開させる。
- 食について話し合うセミナーやワークショップを通して、日本の農業、食の大切さを伝える。
- 研修生を募集し、有機農業や地域移住への後押しをすることで、農業を次世代に繋げたい。

## 和歌山県紀の川市

農事組合法人 あじごころ 味心グループ

環境  
保全型  
農業



「まごころ栽培」がモットー

### 取組内容

○ 和歌山県紀の川市の農事組合法人 味心グループは、米ぬかを主成分に魚粉、野菜や果物残渣などを混ぜ合わせた自家製肥料の「ぼかし」を使っての、「まごころ栽培」をモットーに環境負荷の少ない果実栽培を行っており、化学肥料は一切使わず、環境負荷低減の「見える化」にも取り組んでいる。

### 取組に至った経緯

○ 平成8年、7軒の農家が集まり地元農協の完熟部会としてスタートし、安全安心で美味しい農産物を消費者に届けたいという想いで、モノ作りから販売まで自分たちでこだわってみようと独立（R5年法人化）。

### 取り組む際に生じた課題と対応

○ 自家製肥料「ぼかし」は材料を混ぜ合わせた後、密閉し2週間ほど熟成させなければならぬため、時間と手間がかかる。また近年の米の生産量の減少とともに米ぬかの入手・確保が困難になりつつある。米ぬかは提携農家などの確保に努めるとともに、肥料を混ぜ合わせる攪拌機も大型化し製造量を増やすよう努めた。

### 取組の成果

○ 自家製の「ぼかし」肥料は市販のものとは違い、活力ある土になるので味も良くなり、取引先から高い評価を得ている。また、収穫量の増加にも繋がった。

### 今後の展望

○ 今後は取組に賛同してもらえる様々な企業と協業していきながら、多方面の様々な方々に味心グループをアピールしていけたらと考えている。



温室効果ガス20%削減を示す三ツ星ラベル（環境負荷低減の見える化の取組）



「ぼかし」肥料の製造

環境  
保全型  
農業

湖北地方の豊かな自然を次の世代へ

滋賀県長浜市

有限会社もりかわ農場



取組内容

- 滋賀県長浜市の有限会社もりかわ農場は、水稻・麦・大豆を中心とし、野菜(ブロッコリー、白ネギ)・果樹(いちじく)・農産物加工など複合経営に取り組んでいる。
- 水稻では、平成12年から無農薬栽培を開始し、平成19年から有機JAS認証を受けている。また、全面積で滋賀県の環境こだわり農産物認証を取得するなど、食の安心・安全の確保や環境に配慮した農産物の生産に積極的に取り組んでいる。
- 作期分散のため、早生から晩生まで11品種を作付け。スマート農機の導入による省力化、農地集積と大区画化に取り組むことで、作業効率を向上させている。
- 障がい者雇用を行っており、雇用者個人の適性にあわせて仕事を割り振り、作業場では、作業の「見える化」を図ることで、作業効率を高め作業ミスを軽減するなど、働きやすい職場環境作りに努めている。

取組に至った経緯

- 代表者は、平成7年に滋賀県指導農業士認定を受け、人と環境に優しい農業技術を多くの人に伝えるべく若手就農者の育成に長年取り組んでいる。
- 地域農業を維持・発展させるとともに、自社経営の継続性や担い手の育成に取り組むため平成12年に法人化。



有限会社もりかわ農場の外観

取組の成果(受賞等)

- 「令和6年度 全国優良経営体表彰」の経営改善部門において、農林水産大臣賞を受賞。

今後の展望

- 今後も、滋賀県長浜市で自然環境への負荷を最小限に抑えた持続可能な農業の実践を追求したい。

## 京都府木津川市

### RedRice自然農園株式会社



環境  
保全型  
農業

環境保全型農業で  
育てた農産物を食卓へ

### 取組内容

- 農薬や肥料を使用せず、自然の力だけで育てる栽培方法や環境保全型農業に取り組み、米、オクラ、れんこんなど年間30~40品目を栽培。
- 生産された農産物は「AGBIOTECH株式会社」が展開する「PBF(Private Bio Farm)」を通じて消費者に届けられている。

### 取組に至った経緯

- 人が生きるため必要な「衣・食・住」のうち、食に関わる仕事がしたいという思いから、環境保全型農業を学び、誰もが安心して食べられる野菜等の栽培を実践。

### 取り組む際に生じた課題と対応

- 営農知識が乏しかったため、会社勤めしながら2年間農業塾で栽培技術を学び、さらに1年間、環境保全型農業を実践する生産者のもとで研修を受け、実践的なノウハウを習得。

### 取組の成果

- 環境保全型農業により栽培された米や野菜は、「AGBIOTECH株式会社」により、環境負荷低減の取組を等級ラベルで可視化する「みえるらべる」において三ツ星を取得。

### 今後の展望

- 新規就農する際、農地の確保や農機具の取得、販路の確保などで苦労した経験から、同じ栽培方法での就農を目指す研修生の受入れを拡大する。



「みえるらべる」を取得した商品



オクラ栽培の様子

## 奈良県宇陀市

有限会社 山口農園

環境  
保全型  
農業

有機農産物の生産・人材育成

## 取組内容

- 山口農園は奈良県の北東部に位置し、標高は約450mの中山間地。有機農産物の生産・出荷（一年を通して171棟のハウスで軟弱野菜とハーブ類を生産・出荷）を行う。常に欠品なく生産・出荷できるシステムを目指し、7部門（生産、収穫、調整、販売、加工、教育、総務）を設け、完全分業制により計画的な生産販売を実施。また、農業現場で通用する人材を育成するため、独自の研修制度を設け、実践的に生産を学べる場を提供するとともに、特に有機農業を目指す新規就農者を「山口農園グループ」として入口（農地の斡旋、行政への橋渡し）から出口（収穫した作物の販売）まで支援し、独立を手助けしている。

## 取組に至った経緯

- 平成17年に環境に配慮した安全・安心の有機農業を広めることや、自然に分解される循環型の農業を目指し設立。

## 取組の成果（受賞等）

- 「第22回全国農業担い手サミットinしずおか」において、令和元年度全国優良経営体表彰の担い手づくり部門で農林水産大臣賞を受賞。
- 令和5年12月に全国初の特定環境負荷低減事業活動実施計画として認定。



## 今後の展望

- 現在の経営基盤である第1次産業を核として、2次産業（製造・加工）、3次産業（直売所・宅配事業・観光事業）まで裾野を広げるため、異業種との交流を積極的に深め、ノウハウの蓄積を進める。
- 省力化のためスマート農業の導入やハウスなどの施設の整備を進め、有機農産物の生産拡大を目指す。
- 生産だけでなく、今まで廃棄していた有機農産物のC級品を企業等の社員食堂や子供食堂に低価格で提供する取組を通じ、食品ロスを削減し、環境にやさしい持続可能な消費を拡大。また、規格外品を利用した無添加無着色のペースト等の加工品を開発し、環境型有機農業にも取り組んでいる。